



1636年～1869年(約230年)

# 伊予西條藩を知る ②

(第一次西條藩)一柳家、(第二次西條藩)松平家

第9代藩主 松平頼学 (在任期間 1832～1862年)



第9代西條藩主 松平頼学(よしさと)は、第8代藩主 松平頼啓の長男で、天保3(1832)年父の隠居に伴い25歳で家督を継いだ。天保6(1835)年、第3代頼渡候以来 **106** 年目にして封国西條に入部すると、8カ月滞在して領内を巡察した。この巡察体験もあり、宗家・紀州藩編纂の地誌「紀伊続風土紀」に倣い、天保7(1836)年、藩校「擇善堂」の教授であった**日野和煦**(にこてる)に、西條領内の地誌『**西條誌**』の編纂を命じた。

江戸時代、全国 **300** 侯の大名の中で参勤交代の義務ない定府大名が

**11** 藩(尾張徳川家・紀州徳川家・水戸徳川家・越後家、他)あり、伊予西條松平藩(大名の順位は17番目で**従四位下**と格式が高い)は江戸定府のため、参勤交代が必要なかった。そのため藩公の御国入りは稀で、中には領国に一度も足を踏み入れない藩主もいた。慶応4(1867|明治元年)年で区切ると、約200年間に御帰国された藩主は10代の中で**5**人で延べ**10**回のみである。特に、9代頼学公の御国入りは、前回の頼渡公から**106**年も経っており、待ち望んだものであり、時勢も安定しているだけに盛大を極めたようだ。御国入りの日程は宗藩の紀州家に寄る場合を別にして、東海道を**13**泊で上り、大坂よりは海路船団を組み、**7～8**日、出発してから約**20**日をかけて領国西條市場の「御上り場」(渦井川の船溜まり、川の東に碓神社が見える)に西の堤に数段の石段があり、ここに船を着けた。藩侯はこれから行列を整え西條陣屋に向かわれた。江戸より205里余り、内大坂まで133里余り、海上72里である。天保6年3月13日江戸を御出発、和歌山伝法御殿に御逗留の後、4月22日同所を御出発、5月6日御在所西條に着かれた。(南紀徳川史、西条市誌、鼎史近世下に記載されている。)この時、御渡海の様子は**大船団**で豪華絢爛たる船旅であった。船数は大小合わせて**60**艘、うち大は**27**艘とある。この大船で御国入りに加わった藩士・小者(人足を除く)は総数**483**人、輸送を担当

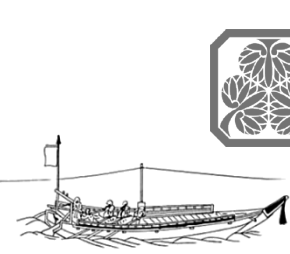
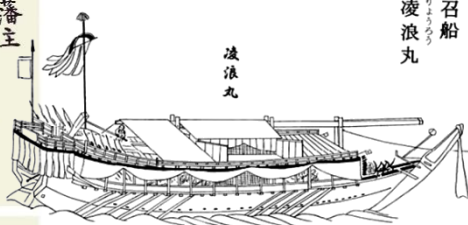
初代	松平頼純公	五回	寛文一〇年(一六七〇)	元禄七年(一六九四)
同	一年(一六九八)	同	同一年(一七〇二)	
宝永	五年(一七〇八)			
二代	同 頼致公	一回	正徳四年(一七二四)	
三代	同 頼渡公	一回	享保一四年(一七二九)	
九代	同 頼学公	一回	天保六年(一八三五)	
一〇代	同 頼英公	二回		

した御水主・加子は町方・浦方・外部からの雇いなど多彩な顔触れであった。

西條藩主  
第9代松平左京大夫頼学公  
西條御帰国船組  
御行列図

天保六年三月晦日江戸御出発  
四月廿二日 紀州御出発  
五月廿六日 西條御着

右、國は紀州より西條までの御船組行列なり



御船大小合せて拾艘

大 二七艘内 五艘御家様、九艘御手船、一三艘高船借船

小 三三艘内 五艘御家様、八艘御手船、二艘高船借船

(伊予西條藩「南紀徳川史」の中江頼学)

- 御召船
- 御船頭 和田茂右衛門
  - 同代 森 善五右衛門
  - 同 森 勘右衛門
  - 御旗取 和田屋八郎
  - 御旗取 二名
  - 御船歌取 四名
  - 御船歌取 三名
  - 歌組 十名
  - 外 五十九名
  - 当番 三十名

